［情報名］
寒冷紗被覆によるかんきつ「カラ」のす上がり及び落葉の防止
［要約］
早春に収穫される「カラ」を、パイプハウスを利用して保温性のある寒冷紗で１０月から収穫期まで被覆することによって、果実品質に影響することなく、す上がり果の発生を軽減し、冬期の落葉も軽減できる。
［機関］
三重県科学技術振興センター・農業技術センター・紀南かんきつセンター・かんきつ担当
［連絡先］
05979-2-0008
［部会名］
果樹
［専門］
栽培
［対象］
果樹類
［分類］
普及
［背景・ねらい］
かんきつ「カラ」は、高品質の晩生品種であるが、その果実は４月中旬から５月上旬にかけて収穫されるため樹上越冬をしなければならず、低温・寒風によるす上がり果の発生や落葉が栽培上問題となっている。そこで、保温性のある寒冷紗(Ｋ社製，ＨＢ－１，透明，透光率９０％)で、１０月から収穫期まで被覆することによって、低温・寒風による被害を回避し、安定生産を実現することを目的とした。
［成果の内容・特徴］
1.パイプハウスを利用して寒冷紗で樹体を被覆することにより、気温は露地より高くなり、低温時でも約２℃高い(図1)。
2.被覆することにより、す上がり果の発生が少なくなり、被害程度も軽くなる(図2)。
3.被覆することにより、冬期の落葉を軽減することができる(表1)。
4.被覆することにより糖度はやや高くなるが、果皮色、クエン酸濃度にはほとんど影響がない(表2)。
［成果の活用面・留意点］
1.「カラ」の安定生産のため、冬期の低温・寒風害回避技術として利用できる。
2.果実袋かけの労力が不要となり、同時に鳥害を防ぐことができる。
3.本試験はパイプハウスでの結果であるが、簡易な平棚施設への活用も考えられる。
［具体的データ］
図1：低温記録日における気温の推移
図2：保温性のある寒冷紗被覆がす上がり果の発生に及ぼす影響(平成８年)
表1：保温性のある寒冷紗被覆が冬期の落葉に及ぼす影響(結果枝単位)
表2：保温性のある寒冷紗被覆が果実品質に及ぼす影響(平成９年４月１５日調査)
［その他］
研究課題名：優良中晩柑の栽培体系の確立(「カラ」の施設化による高品質安定生産技術の確立)
予算区分：県単
研究期間：平成１０年度(平成８年～９年)
研究担当者：市ノ木山浩道、鈴木賢